

公共交通機関の利用増加と経済発展、住みやすい街を目指して

30 班 c1250504 遠藤悠菜

自分たちのチームにない解決策を提案してあった班の中で特に参考になったのは、2 班と 3 班である。まず、2 班は道路自体に問題があると述べており、5 感で受け取れる光と音から運転手に注意を引くレインボーロード作戦が新鮮で参考になった。内側の構造からかえようとするのは時間がたくさんかかってしまうが、この作戦だと道路に設置するだけで注意喚起が出来るだけ効果的であると感じた。また、3 班では地方都市での車依存性に対する問題を掲げていた。この中で、高齢者の車利用者に対して公共交通機関の「得」を伝えられるように割引券や定期券の発行をする取り組みが参考になった。この券発行をする対策は、公共交通機関を利用した分だけ利用者が得をすることになるため行政が呼びかけをするよりも実践的であると思った。また、急激に車から利用を減らすことは不可能であるが第 2 の移動手段になり、利用客の確保もできるようになる対策だと感じた。これらの考えで自分の視野を広げた。

私たちのチームでは問題の原因として、「長時間労働・不規則勤務による負担の大きさ」、「賃金・待遇が他の業種と比較して低い」、「若者にとって魅力のある職業だと認識されていない」、「利用者減少による離職率の低下」、「AI・自動運転で近い未来無くなる可能性の高い職業」、「責任が大きい」と考えていた。しかし、他の班の発表を踏まえて「車依存のデメリットの未周知」、「分かりにくい構造の道路」を追加する。これらの原因を踏まえると、課題は「人手不足が進む中で少ない人員でも公共交通の利便性を維持・向上できる運行体制を構築するか」と、「車依存のデメリットをどのように高齢者を中心とした住民に知ってもらおうか」、「不注意を減らしつつ、道路の見通しをよくするには」の 3 つが掲げられる。これらの課題を共通して解決するためには、利用者と運行側両方の現状に対する視点が重要になってくると思われる。そのため、ビジョンとして「車依存を減らし、公共交通機関の利用客を増やす」、「不注意を減らす道路環境の改善」を設定する。なぜなら、人手不足を解消するにはバス会社の賃金や公共機関の魅力を幅広い世代の方々に伝えていく必要があるからだ。また、不注意を減らせる道路を作ることは深夜バス等の運転でも安全性を高め乗客を乗せて走る事が可能になると考えたためである。

まず、人手不足であると利便性向上が難しい課題の現状は運転手不足で路線が縮小し、利用者が更に減少してしまう。これらを放置すると生活インフラとして成り立たなくなる。次に、車依存のデメリットをどのように伝えるかについての原因として地方では車は生活必需品であることが挙げられる。高齢者は特に車は手放せなくなり公共機関は利用されない。これらを続けていくと事故率が上がり、目的の公共機関の利用を増やす事が達成できない。最後に、分かりにくい道路構造であるため視認性の低下がみられる。そのため運転手の判断ミスが増えてしまい、公共交通への信頼度も共に低下してしまう。

ビジョン 1 つ目に対して、車依存が減ることにより環境への負荷が小さくなる事は勿論、経済発展につながる。しかし、公共交通機関は優先度が低い。なぜなら、自家用車は

利便性や自由度が高い。そこで、3班の利用客には割引券や定期券を購入してもらい、継続的な顧客の獲得を図る。実際に酒田市のるんるんバスでも10回券が500円引で購入する事が可能であるため、普段利用する学生や高齢者に優しい取り組みになっている。そして、この取り組みによって高齢者は健康意識が広がり町の活性化に繋がる。

次にビジョン2つ目の「不注意を減らす道路環境の改善」について、不注意が起きてしまう原因は長時間労働や見辛い道路環境であると考えた。そのため、2班のレインボーロード作戦のように視覚や聴覚への訴えが効果的であると感じた。また、夜道が明るく照らされるため事故の可能性も格段に低くなると思う。

これらの3つの課題は相互に関係している。高齢者の車依存が続く事で公共交通機関の利用者が増えず、これらの人手不足や経営悪化に繋がる一方で道路環境の不安定さは公共交通への信頼感の低下を招く。このように、1つの課題のみを解決しても根本的な改善にはならない。そのため、私たちのチームは複数の課題に共通して作用するビジョンを設定することが大切であると考えた。

しかし、地方財源は限られているため一気に取り組みを行うのは難しい。また、高齢者の意識変化がすぐには追いつかず政策が浸透するのに時間がかかってしまう。他にも、田舎と都心部での格差が生まれやすいという課題がある。

都市と交通の講義を通して、一方的な立場ではなく全員の立場から改善策を考えていく事がポイントであると気付いた。また、関係のないような課題に思えても掘り下げていくと実は繋がっているため地方創生するには繋がりを意識していくべきであると考えた。